鈴鹿市（すずか）

産業
鈴鹿市

自動車産業

鈴鹿市の工業の中心は、自動車産業です。1960（昭和35）年、旧軍用施設跡地に自動車組み立て工場を誘致しました。現在では、市内の事業所数の20%以上、従業者数の50%以上、製造品出荷額の75%以上が自動車等の組み立て工場とその関連の工場で占められています。生産の中心は小型車で、約50%が輸出されています。1979（昭和54）年、この企業は日本の自動車会社で初めてアメリカで現地生産を行いました。その後、海外工場へ技術支援をするマザー工場の役割も担っています。また、工場のあるオハイオ州ベルフォンテン市とは友好都市の提携をしています。

1990（平成2）年、入国管理法の改正により外国人労働者が増加し、2009（平成21）年、鈴鹿市の外国人登録者数は9405人で、三重県で最も多くなっています。国籍別にはブラジル国籍が約46%を占め、その多くが自動車関連の工場で働いています。

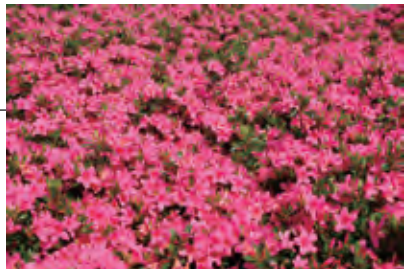
工場の近くには、世界的にも有名なレーシングコースがあり、国際レースが開催され多くの観客が訪れるなど、日本のモータースポーツの聖地ともいわれています。

本田技研工場（鈴鹿市提供）

▪ 自動車が海外で現地生産されるようになった理由を調べてみましょう。

産業
鈴鹿市

サツキ


サツキ（鈴鹿市提供）

三重県は植木の生産がさかんで、特に公園や道路の緑化樹木や庭木として植えられているサツキ、ツツジは、全国で1位の生産額を誇っています。県内では、鈴鹿市が市町村別の植木生産額が全国第2位（2005年度）で、市の花でもあるサツキの生産量は全国一を誇り、「三重サツキ」というブランド名で全国の街を彩っています。

生産の中心地は石薬師地区で、「黒ぼく」とよばれる真っ黒な土は有機質を含み、保水性と排水性に富んで粘性が少ないため、植木の生産に適しています。また、「密閉挿し」という、水やりの手間が省け活着率の良い挿し木の技術が発達しているため、均一な製品を大量に生産できることが強みとなっています。

植木の生産は、1870（明治3）年に、石薬師へ移住した人々が始めたのが最初といわれています。1955（昭和30）年頃から共同仕入れや、栽培技術の向上などにより生産量を増やしてきました。そして高度経済成長期には、東京オリンピックや大阪万博に代表される公共工事等に大量出荷が行われ、公害問題に伴う緑化の推進などにより生産量を増やしてきました。近年は、公共工事や個人住宅の庭の減少などから需要が減少していますが、屋上緑化や壁面緑化など、地球温暖化対策に向けた都市環境の改善の緑化素材として注目を集めています。

サツキの都道府県別生産額2006（平成18）年

順　位	都道府県	生産額（千円）
1	三重県	1,570,776
2	栃木県	1,431,588
3	東京都	775,400
4	福岡県	656,155
5	千葉県	240,160
総生産額		5,854,859

「平成18年花木等生産状況調査」
（農林水産省提供）

▪ サツキの生産が増加した時期の時代背景を調べてみましょう。

人物
鈴鹿市

大黒屋光太夫（だいこくやこうだゆう）

1792（寛政4）年、根室に来航したロシアのラクスマンに伴われて帰国し、ロシアや西洋に関する非常に多くの情報を日本にもたらしたのが、伊勢国南若松村出身の大黒屋光太夫です。

当時、江戸と上方を結ぶ廻船の拠点として賑わっていた白子港の廻船問屋に雇われて船頭をしていた光太夫は、1782（天明2）年、江戸へ向けての航海の途中暴風雨に遭い、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着しました。その後、帰国の許可を得るためロシアの首都ペテルブルグへと大陸を横断する大旅行を行う途中、日本と異なる文化に触れる中で見聞を深めました。

帰国後は江戸で過ごし、学者や大名などにロシア語をはじめとする情報を提供し、蘭学の発展に大きく寄与することになりました。

☜光太夫（左）と磯吉（鈴鹿市提供）

大黒屋光太夫の軌跡（鈴鹿市提供）

【→P111＊43】

▪ 江戸時代の後半、外国の情報を日本にもたらした人物について調べてみましょう。

人物
鈴鹿市

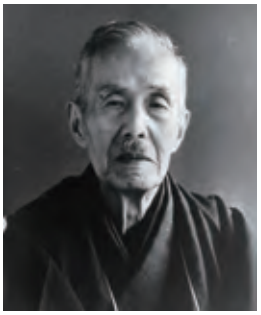
佐佐木信綱（ささきのぶつな）

鈴鹿市石薬師町出身の歌人・国文学者で、万葉集・古典文学の研究や註釈、復刻にも力を尽くした人物が佐佐木信綱です。苗字の「佐佐木」は、中国で名刺を作った時に、印刷の字に本来の「々」が無かったことによるもので、以後好んで使うようになったといわれています。

1872（明治5）年、歌人佐々木弘綱の長男として生まれた信綱は、父の教えを受け5歳から作歌を始め、帝国大学文学部を卒業後、和歌の実作と研究を生涯の目標とし、万葉古写本の発見複製、『校本万葉集』の編集などに大きな功績を残しました。主な著書に『日本歌学全書』『和歌史の研究』『万葉集事典』や、自ら主宰した竹柏会の機関誌『心の花』や歌集『思草』『新月』などがあります。

また、東京帝国大学で26年間にわたり歌学史などを教え、門下生からも有名な歌人が出ています。1934（昭和9）年帝国学士院会員に、1937（昭和12）年には文化勲章を受章し、帝国芸術院会員となりました。

現在、生家は隣接する佐佐木信綱資料館と併せて、佐佐木信綱記念館となっています。


佐佐木信綱

佐佐木信綱資料館（鈴鹿市提供）

【P111＊34】

▪ 佐佐木信綱の歌を調べてみましょう。

伝統工芸
鈴鹿市

鈴鹿墨（すずかずみ）

鈴鹿墨は奈良時代、鈴鹿の山の松脂を燃やしてすすをとり、墨を作ったのが始まりと伝えられています。江戸時代になると、武家のなかで裃が流行し、小紋や家紋の墨染め用や紋書き用として、より上質な墨が必要となりました。また、寺子屋の発達も墨の需要を増大させ、鈴鹿墨は現在の鈴鹿市白子地区を中心に、紀州藩の保護のもとに発達しました。現在も昔ながらの技法を用いて製造され、その生産量は全国の約3割を占め、奈良市と共に、墨の二大産地になっています。

製造工程はほとんど手作りによるもので、すすと膠の混ぜ合わせから始まり、型に入れ、乾燥後仕上げをします。完成まで約100日間を費やし、長年の伝統と経験で身についた技術によって作られています。1980（昭和55）年に国の「伝統的工芸品」に指定され、「伝統工芸士」に認定された墨匠が、その技術を伝えています。【→P101】

鈴鹿墨（鈴鹿市提供）

【→P111＊39】

▪ 鈴鹿の墨づくりが発達した理由を調べてみましょう。

伝統工芸
鈴鹿市

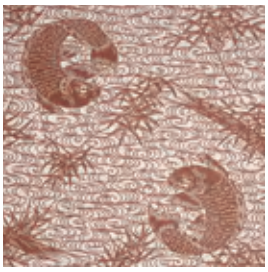
伊勢型紙

伊勢型紙とは、和紙を加工した紙（型地紙）に、鋭利な彫刻刀で文様や図柄を彫り抜き、柄や文様をきものの生地に染めるのに用いるものです。現在は、鈴鹿市の白子・寺家地区を中心に生産され、全国各地に出荷されています。起源は定かではありませんが、室町時代の職人を描いた絵画に、型紙を使う染職人が描かれていることから、室町時代末期には確実に存在していたと考えられています。江戸時代には紀州藩の保護を受け発展しました。

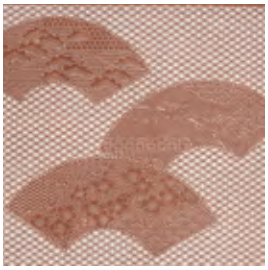
1983（昭和58）年に国の「伝統的工芸用具」の指定を受け、「伝統工芸士」に認定された職人によって伝統技術の維持向上が図られています。近年は、染色用具だけでなく、美術工芸品や建具・インテリアとしても注目を集めています。

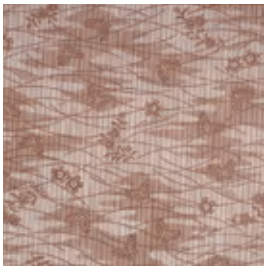
また、1993（平成5）年には重要無形文化財に指定され、伝統的な技術が高い評価を受けています。【→P101】

彫刻技法


突彫（つきぼり）

錐彫（きりぼり）


道具彫（どうぐぼり）


縞彫（しまぼり）

伊勢型紙
（鈴鹿市提供）

【→P110＊9、P111＊39】

▪ あなたが住んでいる地域にある伝統工芸品について調べてみましょう。

COLUMN
コラム

三重県内に伝わる唐人踊り

朝鮮通信使ゆかりの唐人踊りが現在も残されているのは、岡山県瀬戸内市牛窓町、三重県の鈴鹿市東玉垣町、津市分部町の3か所のみです。外国の文化にふれることのなかった当時の人たちにとって、通信使の衣装や音楽・楽器・踊りはめずらしかったのでしょう。通信使の通り道から遠く離れたこの三重の地で郷土芸能、唐人踊りとして今も引き継がれていることから、通信使が人々に大きな影響を与えたことがうかがわれます。

津市分部町に伝わる唐人踊りは、1636（寛永13）年に津市八幡宮の祭礼として始まった祭りの出し物のひとつです。以来、分部町では、戦争などによる中断をはさんだものの360年以上にわたり続けられています。

この唐人踊りは、1991（平成3）年に、三重県無形民俗文化財に指定されました。【→P34】

また、鈴鹿市東玉垣町の牛頭天王社祭礼に奉納される唐人踊りも古い伝統を持ち、地域の保存会のみなさんの努力で今に伝えられています。1975（昭和50）年には鈴鹿市の無形文化財にも指定されています。なお、鈴鹿市白子本町の青龍寺には、第11次朝鮮通信使（1764年来日）の通訳官が書いた額が残されています。

生徒用人権学習教材『わたし　かがやく』【P55引用】

津市分部町の唐人踊り